



やはりお金の話（保護者版）

昨日の朝日新聞朝刊「特集：大学入試センター試験」の記事に、以下のような「お金」の話が出ていました。保護者会全体会でも何回か話題として採り上げましたが、いよいよ現実の問題となって参りました。お子様の受験に向けて頭を悩ませる？一つの資料として、引用してみたいと思います。ご参考まで。

＊

昨春大学に入学した学生の受験から入学までにかかった費用は、国公立大と私立大を合わせた全体の平均総額で約170万円だったことが、全国大学生生活協同組合連合会の調査で明らかになった。私立大は受験料が減少し、奨学金や学資保険の敬遠傾向は続いているという。（同連合会が昨年4～5月、全国122の国公立大と私立大の新入生の保護者にアンケートし、2万1310人から回答を得た。）

調査によると、かかった総額の平均は国公立大は約167万円、私立大が約175万円で、ともに前年度並み。差が約8万円と大きくない理由は、私立大の方が文系や自宅生の割合が高いためだという。内訳は、入学金や授業料などの「入学した大学への学校納付金」が費用総額に占める割合が最も高く、国公立大は62万4800円、私立大は93万8800円だった。

「出願をするためにかかった費用」（受験料と願書を取り寄せた費用）は、私立が14万9500円で前年比2万2千円減。2011年（13万8500円）から16年（16万6200円）まで緩やかに増加していた私立の受験料が、17年は前年比2万700円減の14万5500円になった。背景として前年から平均受験学部数が微減していることと併せ、ウェブによる出願をはじめとした出願時の割引制度の利用が広がったこと

も考えられるという。

費用捻出の工夫は、「学資保険に入っていた」が最も多く53.9%だが、14年から減少傾向が続いており、これまで最も高かった13年と比べて8.0ポイント減少した。一方、「貯蓄を切り崩した」は増加傾向で、35.1%と続いた。

「奨学金を申請した（する）」は32.9%で12年以降緩やかに減少している。担当者は「保護者の中には貸与奨学金といっても借金という意識が強い人もいる。学資保険も含め、貯蓄に回っている傾向がある」と指摘する。

また、高校までの教育費も一部で増加傾向だ。文部科学省が16年度、幼稚園から高校卒業までの15年間の学習費の総額を全国1140校の約2万9千人を対象に調べたところ、全て公立に通った場合は約540万円、高校だけ私立だと約716万円、全て私立に通った場合は約1770万円だった。

特に全て公立の場合が2年前の前回調査と比べ、約17万円（3%）増え、文科省の担当者は「制度の変更による高校の授業料の負担増や、高校生が塾に通うためにかけた費用の増加が一因」と話す。

国公立大の中には、選考の上、入学金の免除や支払いの猶予制度がある大学もある。日本学生支援機構の貸与奨学金は、進学前に予約をする制度の他に、入学した春以降に各大学を通して申し込む「在学採用」もある。日本政策金融公庫の教育ローンは、350万円以内の融資が可能だ。問い合わせは教育ローンコールセンター（0570・008656または03・5321・8656）。